

序文

本年の全国調査報告書を作成しましたので、皆様にお届け致します。この報告書は、症例を積み重ね、臨床・研究にお忙しい中登録して頂いた医療機関の皆様、そして集積された膨大なデータを解析し、わかりやすくまとめて頂いた日本造血細胞移植データセンターの皆様の努力の賜物です。ご尽力頂いた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。この報告書は移植に携わってきたすべての関係者の誇るべき歴史であり、将来への道標となるものであり、手に取るとズシリと感じるその重さは価値ある膨大な内容を反映しています。

近年の移植数の動向を概観しますと、ミニ移植の導入とともに2000年以降とくに高齢者に対する移植数が増加していた状況が平衡状態になるとともに、右肩上がりに増加してきた移植数の増加がこの数年間鈍化する傾向が見られます。これはわが国の人口動態が減少に転じたことなどが要因と推測されます。このような背景から、移植医療は移植適応拡大とともに移植数増加一途の成長期から、最適な移植を充実させる成熟期に移行しつつあると感じさせられます。

HLA一致同胞間骨髓移植としてスタートした造血細胞移植は、バンクドナーから非血縁者間移植が行われるようになり、さい帯血移植や末梢血幹細胞移植の導入、GVHD予防法の進化、ミニ移植の導入、HLA半合致移植が可能となるなど、多様な移植が行われるようになりました。すなわち、医療機関・主治医は症例ごとに最適な移植を選択することが求められるようになりました。この報告書は過去から現在に至るまで多くのことを語り、医療関係者に進むべき道を示唆する重要な資料を提供してくれます。

本全国調査はわが国の造血細胞移植の歴史の記録であるのみならず、その成果を解析するための貴重なデータベースでもあります。学会ワーキンググループを通じ、多くの成果が報告され、その質の高さから、わが国のTRUMPは、米国のCIBMTR、欧州のEBMTとともに世界3大レジストリーとして国際的に認知されています。学会員を代表し、日本造血細胞移植データセンターの皆様に敬意を表します。一方、学会員の皆様におかれましては、このデータを活用し造血細胞移植の成績向上を目指して、さらに活発に研究活動を展開されることを願います。

最後に、移植成績は単なる統計数字ではありません。一人一人の患者さん、ドナーと家族、移植医、その移植に携わった多くの医療スタッフの努力の積み重ねが40年の歳月をかけてなした結晶であることを、本書を使用される会員の皆様、移植成績を解析される皆様には是非思い起こしていただきたいと願うものです。

第41回日本造血細胞移植学会総会会長 井上 雅美
大阪母子医療センター 血液・腫瘍科